表現運動の授業における指導の困難さを軽減する一考察(1)
－小学校教員の初任者授業に着目して－

Consideration to reduce the difficulty of teaching in the expression movement class(1) -Focusing on the beginner class of elementary school teachers

梶谷朱美　　永瀬七月
（保育学科）　（県内公立小学校教諭）

キーワード：ダンス教育、表現運動、小学校教員、指導力向上

1. はじめに

現代では、テレビや SNS から日常的にリズミカルなダンスを見ることができる。高い技能に裏打ちされた躍動感あふれるダンスは見る者を魅了する。また、2020 年の国際オリンピック委員会（IOC）理事会において、2024 年に開催されるパリオリンピックからブレイキン（ブレイクダンス）がオリンピックの新種目として採用され、ダンスがオリンピック競技の一つになった。

学校教育で、この「ダンス」を扱うのは、表現運動・ダンス領域（小学校低学年の「表現リズム遊び」、中・高学年の「表現運動」、中学校以降の「ダンス」）である。

学校体育におけるダンスは、戦後の教育改革のなかで、「創作ダンス」が取り入れられ現在に至るが、1989 年（平成元年）の中学校学習指導要領、および高等学校学習指導要領の改訂で、中学校と高等学校が男女共修となり、1998 年（平成 10 年）の改訂では、小学校表現運動領域の内容に「リズムダンス」が、中学校・高等学校ダンス領域に「現代的なリズムのダンス」の内容が加わった。さらに、2012 年（平成 24 年）度には中学校において「武道」と「ダンス」が必修化された。近年のダンス文化の隆盛は、生涯スポーツを希求する学校体育の影響も大きいと言えるだろう。

酒向（2020）は、「身体全体を通して他者との関わりを促すダンス教育は、直接的に非言語的な『対人コミュニケーション能力』を養う領域として、極めて重要性の高い領域であり、創造性教育の中核である。」と述べている。つまり、言語は用いないが、身体を動かすことを通してコミュニケーション能力を高める領域であることを強調する。また、「正解がないものに対し、他者と協働しつつそれぞれの異なる『解』を見出していくという学びの形態は、『探求型学習（課題解決型学習）』そのものである。」と述べている。高橋（2020）は、

「ダンスや体育は、生身のからだでの交流が自他の気づきに直結するからだの対話である。」と述べ、柳瀬（2020）は、「表現運動・ダンスの学びとは、互いに他者の表現を受け止めつつ自分の違和やひらめきを表出し合う応答としてのダンス文化への参加である。」と述べている。また、「そのような学びは、自分たちの社会や生活を自分たちでつくっていくという生きるための技法となりうる。」とダンス教育の意義や価値を強調する。

2. 研究の背景

1)表現運動の指導の課題

2017 年（平成 29 年）3 月に、小学校学習指導要領が告示され、翌年 2 月に小学校学習指導要領解説体育編が発行された。小学校体育科表現運動領域でも主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が推進されている。

しかし、若井ら（2018）によると、体育における表現運動・ダンスの授業は、児童・生徒が何を学ぶのか（学習内容）、指導者がどのように系統立てて学習を進めていけばよいのか（学習方法）、「教員や児童・生徒にとてもわかりにくい運動領域である。」と報告している。加えて、「小・中学校における教師は、指導熟練度に問わず表現運動・ダンスの指導に取り組む必要があるが、教育現場では、表現運動・ダンス授業に対して苦手意識を抱く教師も多く、ダンス授業等の指導法が十分に理解されずに困惑が続いているのが現状である。」と述べている。和光ら（2021）も学校現場においてのダンス指導やダンス学習が発展しない原因は、「ダンス特有の指導の難しさが指導者自身の不安や苦手意識と繋がっているからではないか。」と報告している。寺山（2007）は、「表現運動の学習を通して、『何を教えてよいかわからない』指導者は、その不安から『授業を展開する自信が欠落』し、最後には『指導しない』という負の連鎖に陥ると、学習に意義を認めていても実践できない状況になる。」と報告している。

2)表現運動の授業における指導の困難さ

寺山（2007）は、表現運動授業の困難さを、「学習内容の不明瞭さ」「児童の反応と指導者の対応」「指導言語」「教材の準備」「授業時間の確保」「子どもが……〇〇ない」という 6 点に集約している。また、和光ら（2018）は、小・中学校教員がダンスを苦手とする原因として、「身体表現に対して抱く『難しさ』より『恥ずかしさ』の方が大きく影響している。」ことを報告している。加えて、「『恥ずかしさ』の根本にあるのは、自己を解放して何かを表現することや、感じたことや考えたことを動きに置き換えたり即興表現したりすることにある。」と述べている。

若井ら（2021）は、ダンスの指導経験が 10 年以上かつ毎年授業を受け持つ

条件の調査回答者を「熟練指導者」、また、ダンス指導経験が 10 年未満かつダンス授業を受け持つ年と受け持たない年がある条件の調査回答者を「未熟練指導者」と位置づけ、次に示す表１のように報告している。

表１　「表現運動・ダンス」指導時の困難さについて（梶谷作成）

	熟練指導者	未熟練指導者
困難さを感じる観点	・画一的な動きではなく多様で自由かつ独創的な動きを引き出すこと ・即興的な表現に導いたりすること	・授業づくりや指導法に関すること 〇技能評価の視点 〇授業の構成方法 〇児童・生徒に向けての言葉のかけ方等、授業中の子どもとの関わり方

若井ら（2021）は、「未熟練指導者は熟練指導者よりも多くの項目において困難さを感じていると同時に、このような結果の背景には、心理的要因や地域特性、学校の教育実践が複雑に絡み合っていることが考えられる。」と述べている。

3)表現運動の授業に求められる指導力と指導の困難さ

村田（2008）は、「表現運動・ダンス学習が他の運動領域とは異なる学びのスタイルとして『心身の解放』『身体による豊かなコミュニケーション』『今、ここから創り出す問題解決学習』である。」と述べている。安江（2014）は、表現運動の授業における教師の指導力について、「『双方向の授業』『臨機応変に学習者を導く能力』『多様な個性の響き合いの実現』のキーワードが浮かび上がってくる。」と述べ、「子どもの内にある潜在的な力や可能性を引き出す力。」と説明する。また、安江（2014）は、「スポーツのように勝敗や技能の優劣の序列にしばられることのない表現運動の学習こそ、体育専門の教員ばかりではない小学校教員に向いている領域であるとも考えらえる。」と述べている。

しかし、和光ら（2018）は、「教育現場でダンス学習を担当する指導者は、第一に身体表現に対する『恥ずかしさ』を取り除く必要がある。」と述べ、「指導者が自己を解放できる単純な動きやすぐ真似ることの出来る動きを習得することで身体表現に対する抵抗感を取り除き、自信や向上意欲を持つことが重要だ。」と説明する。また、「恥ずかしさ」の根本にあるのは、前述したように、「自己を解放して何かを表現することや、感じたことや考えたことを動きに置き換えたり即興表現したりすることにある。」と報告している。

このような先行研究から、表現運動の授業に取り組むためには、まずは、「恥ずかしい」等の心理的な要因を取り除くことと授業づくりや技能評価等に関する困難さを軽減することが重要であると推察できる。また、指導経験を重ねた教員は、児童との直接的な関わりの中での指導内容や指導法に着目した困難さに直面すると考えられる。

3. 研究の目的

本研究では、県内の新規採用教員であり、初任者研修訪問指導で表現運動の授業に取り組んだ永瀬七月教諭が「表現運動授業に取り組む思い」や「事前の教材研究・実技研修」、「3年生の表現の実践」を通して、指導の困難さに直面し、それを軽減していった過程や児童の変容に着目する。永瀬教諭のインタビューや自由記述の分析、実践した授業の考察を通して、小学校における「表現運動」の指導場面での困難さを明らかにし、指導者自身の不安や苦手意識を解決する方策を明らかにすることを目的とする。

4. 研究の方法

1）全体の概要

本研究は、令和 4 年度新規採用教員である永瀬教諭が 0 小学校での初任者研修で実践した小学校 3 年生体育科表現運動「サンサン忍者、参上！」に取組む経緯や「教材研究・実技研修」、「授業実践」を研究対象としている。

全体の概要は以下に示す。

期日	内容
7 月上旬	永瀬教諭が教材研究のために H 小学校 M 教諭に面会する
7 月 28 日㈭	教材研究のために本研究者と協議 永瀬教諭と 0 小学校校長、他 1 名来室
9 月 21 日㈬	教材研究（指導案作成）のために本研究者と協議
10 月 19 日㈬ 15:00～17:00	0 小学校校内実技研修会 会場：0 小学校体育館　参加者：15 名
11 月 9 日㈬	教材研究（指導案：単元計画・展開検討）のために本研究者と協議
11 月 28 日㈪	永瀬教諭初任者研修に係る学校訪問指導：表現運動研究授業
1 月 19 日㈭ 17:00～18:00	半構造化インタビュー　会場：本研究者研究室 ※後記の 3）研究分析の観点⑴⑵⑶からインタビューし、インタビュー内容はボイスレコーダーにて録音し全て活字に起こし分析する

2）研究対象者及び児童

本研究の対象者であり共同執筆者ある永瀬教諭は、令和 4 年度島根県新規採用教員として採用され、令和 4 年 4 月に県内東部の 0 小学校に赴任した。3 年 3 組担任。児童数は 31 名。永瀬教諭を本研究の対象とした理由については、研究の目的で述べたとおりである。

以下に主な経歴を示す。

平成９年７月　県内Ｍ市出身

令和２年３月　Ｓ大学教育学部（学校教育課程Ⅱ類）において小学校一種免許状、中学校・高等学校一種免許状（保健体育）を修得して卒業

令和４年３月　Ｓ大学教職大学院（大学院教育学研究科教育実践開発専攻）卒業

令和４年４月　島根県新規採用教員として０小学校に赴任する

3）研究分析の観点

ここでは、研究分析の観点として、次の３段階を示す。本稿では、⑴⑵について述べるとともに⑶については、表現運動の授業における指導の困難さを軽減する一考察(2) としてあらためて続稿に示す。

⑴初任者研修の授業に表現運動を選択するまでの経緯や表現運動授業への思いを永瀬教諭の自由記述とインタビューから分析し指導の困難さとその解決策を考察する。

⑵表現運動授業に向けての教材研究や校内実技研修会について、永瀬教諭の自由記述とインタビューから分析するとともに、校内実技研修会については、研修参加者の動画や写真で記録し、研修後の感想を記述してもらう。

⑶小学校３年生体育科表現運動「サンサン忍者、参上！」について、永瀬教諭の１時間ごとに授業分析やインタビューから指導の困難さやその解決策を探ると同時に今後の課題も考察する。

5. 結果と考察

1）初任者研修訪問指導授業に「体育科」の「表現運動」を選択するまでの経緯と考察

ここでは、研究対象者である永瀬教諭が初任者研修訪問指導授業で表現運動を選択した経緯について記述した内容を掲載する。（下線は梶谷）

Ｓ大学教育学部（学校教育課程Ⅱ類）で小学校一種免許状、中学校・高等学校一種免許状（保健体育）を修得して卒業したのち、Ｓ大学教職大学院（大学院教育学研究科教育実践開発専攻）へ進学し、小学校体育科のボール運動領域について研究を進めてきた。

そもそも、学部生時代で「体育科」を選択した理由は、純粋に体を動かすことが好きだったからであった。しかし、教育実習を通じて、いつしか体を動かすことの楽しさや達成感を、授業の中で子どもたちに味わってほしいと考えるようになった。このような考えに導いたのは、教育実習生時代の担当であるＹ教諭との出会いがあったからだ。Ｙ教諭は、「分かる、できる」授業を展開する

ために、ただ運動量の確保をするのではなく、子どもたちに対話を促し、議論できるような場を設けることや、下位教材の重要性について説いてくれた。

教育実習をきっかけに、もっと体育科に関する知識を習得したいと考え、大学院へ進学してからは、自身が幼い頃から続けてきたソフトテニスの経験を活かし、東京学芸大学の今井茂樹考案の「テニピン」を題材に、研究を進めていった。

S 大学教職大学院では、2 年間同一の学校にて実践研究を行うというカリキュラムがあった。そこで、小規模校である H 小学校にてテニピンに関する実践研究を行った。実践研究では、単に研究に関する授業を行うのではなく、インターンシップの役割も兼ね、授業参観や、学校行事、式典の参加など、広く学校教育活動に関わることができるという特色があった。その H 小学校で、体育科に力を入れて取り組む M 教諭と出会ったのである。

M 教諭の体育科の授業は、子どもたちが「見せ合い」を行う時間を多く取り入れていた。具体的には、ＩＣＴ機器を用いながら、ポイントに沿ってアドバイスをし合うという形である。良い・悪いの判断だけでなく、どんな所が良かったのか、どうすればもっといい動きができるのか、子どもたちが互いに意見を交わしながら、試行錯誤している点が印象的であった。

そんな M 教諭は、研究授業で「表現運動」を実践しており、これが表現運動との出会いとなった。子どもたちが「お祭り」のテーマに沿って全身でなりきり、笑顔で表現する姿を見て、体育で学級経営をするということの有効性を感じた。

当時、筆者は非常勤講師として勤務をしながら大学院に通っていた。運のいいことに、小学校 2 年生を対象とした表現遊びの授業を行えることとなり、先に述べた Y 教諭の指導のもと、授業を行った。M 教諭の実践から学んだことなど、自分なりに熟慮して挑んだ授業であったが、発問、児童の動きのピックアップの仕方、段階を踏んだ指導など、多くの課題が残る結果となった。そこで、筆者は「どう指導をすればよいのか分からない」といった思いから表現運動に対して苦手意識をもち、そのまま大学院を卒業した。

そして、就職をして初任者研修が始まった。本校は研究で算数に力を入れており、当然初任者研修での訪問指導も算数で行うのが自然の流れであった。しかし、筆者は、Y 教諭や、M 教諭から学んだことを活かし、体育科で授業がしたいと考え、教科を変更してもらうこととなった。そこで、何の領域の、どの運動を取り挙げて授業をしようか考えた際に、これまで研究を重ねてきた「テニピン」が思い浮かんだ。クラスの子どもたちは 3 年生で、テニピンに取り組むには良い機会であった。

しかし、本校の年間計画と訪問指導の日程を照らし合わせてみると、偶然に

も「表現運動」の実施目安の時期と重なっていることが判明した。どう指導をすればよいのか分からなかった、という思い出が蘇り、年間計画は見なかったことにしようとしたが、担任として学級をもつことができるようになった今こそ、表現運動に取り組むべきではないか、という考えも頭に浮かんだ。

悩んだ末に、体育科の専門である校長に相談をすると、表現運動に力を入れている教員は少ないこと、誰もが苦手だからこそ、初任者が取り組んでみることの意義を伝えられた。そして何より、今、目の前にいる子どもに、より必要だと感じるのはどちらの運動領域なのか考えるよう助言をもらった。

そこで、学級の子どもたちの実態を考えることとした。子どもたちは素直で明るく、何事にも一生懸命取り組むことのできる集団である。しかし、体を動かすことに苦手意識を持ち、積極的に運動をしない児童が一定数いることや、グループを意識し始めたことにより特定の友達としか関わることのできない児童がいることが思い浮かんだ。表現運動は、自己の心身を解き放し、イメージの世界に没入してなりきって踊ったり、表したい感じを表現したりすることが楽しい運動であり、互いのよさを生かし合って仲間と交流して踊ったりする楽しさや喜びを味わうことができる運動である。そこで、学級の実態と照らし合わせた際に、より、子どもたちの繋がりを強くできそうな表現運動で授業をすることに決めた。

このように、永瀬教諭は幼いころからソフトテニスに親しみ、大学院では小学校体育科のボール運動領域を研究している。教育学部時代の実習で出会ったY教諭の授業から、体育科の特性や体育科における系統的な学習の展開、主体的で対話的な学びに注目する。また、大学院の実践研究では、インターンシップの役割も兼ねて、学校教育活動に広く関わり経験を積んでいる。その実践研究でH小学校のM教諭と出会い、初めて表現運動授業を観察する。

永瀬教諭は小学校体育科表現運動との出会いや自身が表現運動授業を選択した経緯を次にようにインタビューで答えている。

「（略）学生の頃、大学院で研究しているときから体育科はずっと学級経営ができる教科だ、体育は学級が集団としてあらわれる教科だと言われていて、はじめは、規律のことだけかなと正直思っていて、子ども同士の親和というか、子どものつながりとか、集団としての高まりみたいなことは意識していなかったのですが、大学院時代にH小学校のM教諭の授業を見たときに体育で学級経営をするとはこういうことなのかと感じて、それは運動量がすごくあるわけではなく、私はそんなイメージをもっていたのですが、運動量が絶対だと思っていたんですが、子どもが話したくなる体育というか、お互いにいい所を言い合って、プラスの声がけとか、だれとでもペアがさっと作れて、高学年だったのに男女でできるし、ああすごいなあと衝撃を受けました。

（略）就職をして、ここで訪問指導の体育をやっておかないと学級経営の意味は分からないなあと思って・・・。別にクラスは、1学期は学級崩壊などもなかったのですが、今ここで知っておきたいと考えたし、学級が集団としての高まりがないなあと感じたときに、自分が研究してきたテニピンでそれができるかなと思って、ボール運動では攻守一体型で立場がどうしても分かれるし、勝敗が尽くし、勝敗がつくスポーツでいきなりできるのかなと考えました。年間計画に表現があった時に、ボール運動と体づくりとなわとびと表現運動がいろいろ位置付けられていたけど、表現運動はないなあと、はじめに思った。そう思った理由は、自分に自信がないし、踊れないし学生の頃も表現をやったけどさわり程度しかしていないし。大学の時に石になったりして、高校生の時はふざけながらやっていて記憶にないし、表現運動は一番ないなあと思っていました。でも、大学院時代のM教諭の「お祭り」の授業を見ていたので、M教諭のあの授業はすごかったなあ、その先生に一から教えていただいた先生の授業だし、ちょっとやってみようかなあ。ちょっとやってみようかなあ。苦手だしなあ、いやあ、苦手だからやってできたらずっと続けていけばいいし、自信になるし、いつかはやらないといけないから、じゃ、今教えていただいてやろうかなあと思ったんです。最初。
（略）M教諭の学級づくりやY教諭の授業を見て教えていただいていたので、その体育でのモデルがなかったら表現運動の授業はなかったと思う」

このように、永瀬教諭は、初めて担任した学級の子どものために、学級集団づくりや学級経営につなげようと迷った挙句、表現運動の授業を選択する。尊敬するM教諭の授業を想起し子どもたちが全身でなりきって笑顔で表現する姿を思い出し、チャレンジすることを決意する。学級経営の視点から体育の表現運動をとらえ直し、自己の心身を解き放しなりきって踊ったり、互いのよさを生かし合って仲間と交流して踊ったりする運動であることに表現運動の意義や価値を見出している。

以上のことから、初任者研修の授業に表現運動を選択するまでの経緯や表現運動授業への思いや迷いを以下の表2-1に示した。

表2-1 表現運動の授業における困難さを軽減する方策（梶谷作成）

表現運動の困難さ	困難さを軽減する方策や理由
・表現運動の授業を自ら公開しようとする迷いを克服する ・過去の表現運動の授業がうまくいかなかった経験から生じる不安やわからなさ	・教員自身が学級の実態から学級経営や集団づくりにつながる表現運動の意義や価値を明確にすること （なぜ表現運動の授業を行うのか等の目標の設定） ・先輩教員の表現運動授業の観察を

	行うと同時に授業のプラスのイメージをもつ ・表現運動の授業について身近に悩みや相談を打ち明けられる先輩教員や管理職の存在

2）授業に向けての教材研究や実技研修会の成果と課題

(1) 0小学校校内実技研修会

永瀬教諭は、初任者研修訪問指導授業で表現運動を公開することを決めて、早速、H小学校のM教諭に面会し、体育研究に熱心に取り組んでM教諭から話を聞いている。そして、0小学校長とともに本研究者を訪ね、教材研究を重ねるとともに後日、校内での実技研修会を行った。

実技研修の講師は本研究者が行い、研修の様子を動画撮影と記録を取り、研修会後に永瀬教諭の感想を記述とインタビューで記録する。

実技研修会の内容は次のとおりである。

①研修会のテーマ

だれでもできる表現運動～知識と技能をつなぐ表現運動の授業のあり方

②研修の内容

・実技研修のテーマを「力いっぱい」「自分らしく」「認め合って」と示し、簡単なアイスブレイクのゲームやリズムダンスで心と体のほぐしを十分に行う。リズムダンスでは、参加者が経験している動きや日常の動きをいかし、曲のリズムに乗って楽しく踊ることを約束する。へそ（体幹）を中心に乗って弾むことを意識すると同時に始めは本研究者の真似を行い、慣れてくるとグループでリーダーを交代しながら続けて踊ることを約束した。

・次に、全員で講師の声がけのもとに下位運動となる「だるまさんがころんだ」を行う。「動く―止まる」の運動課題を意識しながらおもしろいポーズを全身で表したり、2人組になって忍者がころんだなどのイメージとかけ合わせたりして遊びから表現につなげていった。

・「忍者」を題材として取りあげ、表現運動学習との出合わせ方、題材との出合わせ方を研修し、単元前半の忍者カルタを使用した学習の進め方や見せあいの方法と単元後半の表したいカルタを３～４枚つなげてひとまとまりの動きにしていく学習課程を実技研修を通して確認していった。

永瀬教諭は、校内実技研修会までの過程や感想を次のようにインタビューで答えている。

（中略）M教諭も研究的に取り組んでおられたし、実際に7月にM教諭に聞きにいって、空間のことやずらしのこととか聞いて、まずは知識を知りたいと思って

いろいろ聞いて、久しぶりに遊びに行く感じで訪問しました。でも、それでもわかんなくて、理論的なことを教えていただいたけどわかんない。なんかわかるようでわからないので校長先生に相談したら梶谷先生を紹介してくださった。

実際に実技研修会をやって、0 小学校で、全体で経験したことが、全体での実技研修会がすごく大きかったです。みんなで実際に実技研修をやったことが‥。校長先生がつなげてくれたし実技の研修ができて実践して、こんな環境はなかなかない。実際に学年部で取り組みが始まりました。表現の授業をするのは、本当にいやだった。やだああ。決めてからも。でも、動いたらすぐ消えました。自分がやってみたら楽しいし、全体で動いて、集団でこんな感じになるんだな。他の人が動くとこんな感じになるんだなあと、みんなでやってみて見えた。見通しがもてたことがすごく大きかった。研修がなかったら私はできなかったです。どうやってやればできるかをわかるのが大きい。

永瀬教諭は、実技研修会後に次のように記述している。(下線は梶谷)

校長に報告をすると、苦手なことに挑戦するということで筆者の不安に寄り添い、表現・リズム運動の知識に長けている本研究者を紹介してくれた。
そして、実際に話をしたり、勤務校に招いて表現運動の研修会を行ったりしていく中で、授業づくりを進めていった。

研修会では、表現運動に抵抗なく児童が取り組めるようにするための授業構成や、授業の上での適切な指導者の声掛け、押さえたい知識と技能について学んだ。表現運動を教えることに苦手意識があるだけでなく、自身が体全体を使って表現をするということに恥ずかしさや自信のなさからくる抵抗感も持っていたが、「ハイ・イハゲーム」、「座位から始めるリズム運動」、「だるまさんが忍者」など、段階を踏んだ運動によって安心感を持ち、運動に取り組むことができた。(写真１,2)

また、共に研修に参加した本校の教員たちも、表現の指導の難しさを感じており、研修前は何を正解とするか分からない運動領域であると話をしていたが、本研修を通し、指導者に表現運動で目指すことを教授されるだけでなく、お互いに抱えている疑問や不安を同僚で体を動かしながら対話することで、すぐにでも実践に活かすことができそうだと研修の有用性を述べていた。

写真１　実技研修会の導入

写真２　忍者カルタに挑戦！

以上のことから、表現運動授業に向けての教材研究や校内実技研修会を通して、前述の研究分析の第二段階で示した観点で以下の表 2-2 に示した。

表 2-2 表現運動の授業における困難さを軽減する方策（梶谷作成）

表現運動の困難さ	困難さを軽減する方策や理由
・「踊ることが恥ずかしい」「自己表出、自己開示が苦手」「表現運動は経験が乏しい」という心理的な要因で自信がもてない ・過去の表現運動の授業がうまくいかなかった経験から生じる不安や授業づくりのわからなさ	・実技研修会を勤務校の教員と一緒に行うことで次の 3 点が明らかになる ①実技研修を自校の教員と受講し他者の動きを見ることで自身の恥ずかしさが軽減する ②表現運動の一単元（学習課程）を自身が経験することで授業の見通しが明確になり不安感が軽減する ③学校全体で表現運動に取り組む雰囲気づくりや環境づくりが整う ・校長や研究者に直接質問する機会があることで安心感がます

6. まとめ

本研究では、永瀬教諭が初任者研修で表現運動の授業を選択し実践に入るまでの経過や気持ちをインタビューや記録から考察していった。大学院で体育を学び、小学校教員のなかでも体育科に対する意識が高い永瀬教諭でさえ 3 年生担任として表現運動を指導することの困難さに直面している。

表現運動を教えることに苦手意識があるだけでなく、自身が全身で表現をすることに恥ずかしさを感じ、その自信のなさからくる抵抗感を抱えていた。

しかし、自校で行った同僚教員との実技研修会を通してその抵抗感が和らぎ、表現運動学習の導入の方法や「忍者」を題材とした単元全体の進め方を経験したことで授業のイメージが明確になり困難さが軽減したことが理解できた。また、校長の強いリーダーシップのもと、全教員で実技研修会に取り組んだことが学校全体の表現運動学習への機運を高め、教員同士での情報共有を促し学校全体で表現運動に取り組む雰囲気づくりや環境づくりが整ったことも困難さ軽減において重要な要素だと分かった。

このように、教科書のない体育科の授業で、すべての小学校教員が表現運動の授業に取り組める典型教材の開発や行政主催の研修会や各校での実技研修会の開催の必要性、大学での教員養成プログラム等の見直し等に示唆を与える内容となった。

このような内容を踏まえながら、続稿の「表現運動の授業における指導の困

難を軽減する一考察⑵」では、永瀬教諭の実際の授業における指導の困難さやその解決策を探ると同時に今後の展望も考察していく。

７．謝辞

本稿をまとめるにあたり、永瀬七月先生には共同研究者として本研究の趣旨を理解し、インタビューや共同執筆にご協力いただきました。また、永瀬先生とのご縁をいただき、ご助言いただいた勤務校の塚田校長先生をはじめ教職員の皆さまのご理解、ご協力に厚くお礼申し上げます。

【引用文献・参考文献】

1)酒向治子(2020):激動の時代に向けたダンス教育の意義,体育科教育,68(12),大修館書店，pp.12-15
2)高橋和子(2020):ダンスとはからだの境が溶解していく瞬間,体育科教育,68(12)，大修館書店，p.9
3)寺山由美（2007）:「表現運動」を指導する際の困難さについて―千葉県小学校教員の調査から―，千葉大学教育学部研究紀要・第 55 巻，pp.179-185
4)村田芳子（2008）: 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは？―学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ―，体育科教育，56（3)，大修館書店，pp.14-18
5)文部科学省，中学校学習指導要領　解説保健体育編，1989
6)文部科学省，高等学校学習指導要領　解説保健体育編　体育編，1989
7)文部科学省，小学校学習指導要領　解説体育編，1998
8)文部科学省，中学校学習指導要領　解説保健体育編，1998
9)文部科学省，高等学校学習指導要領　解説保健体育編　体育編，1998
10)文部科学省，中学校学習指導要領　解説保健体育編，2012
12)文部科学省，小学校学習指導要領　解説体育編，2018
13)安江美保（2014）: 表現運動の授業で求められる指導力に関する一考察：実践経験の少ない 2 人の指導者の取り組みの過程に着目して，ノートルダム清心女子大学紀要，38 巻 1 号，pp.126-141
14)柳瀬慶子(2020):表現運動･ダンスの学びのデザイン,体育科教育,68(12),大修館書店，pp.24-27
15)若井由梨・山崎史恵・吉田重和（2021）: 教育現場における「表現運動・ダンス」指導時の困難さについて―新潟市内小・中学校現職教員への実態調査をもとに―，新潟医療福祉会誌 21（2)，pp.67-77
16)和光理奈・眞﨑雅子（2018）: 小・中学校教員のダンス授業と苦手意識の考察，中京大学体育研究所紀要，Vol.32，pp.13-18